

北海道科学大学高等学校におけるグローバル教育の推進

Promotion of global education at Hokkaido University of Science High school.

山下 卓* 渡辺 弘毅* 西田 茂*

Suguru Yamashita Kouki Watanabe Sigeru Nishida

概要

本校生徒に対する各種調査では海外での学びや留学に対し、興味はあるが機会がないために躊躇している現状が明らかになっていった。そのような現状を踏まえ、北海道科学大学高等学校ではグローバル人材育成と高校卒業後も見据えた、今後の長期留学のきっかけになるための海外短期研修を企画した。今年度3回目となるニュージーランドでの研修内容とその成果、今後に向けての展望を報告する。

1. はじめに

これまでの本校の海外研修の実績としては前身の北海道尚志学園高等学校時代に修学旅行のコースとしてハワイを選択制にしていたことと、個人の取り組みでの海外留学が稀にある程度であった。学校改革の中で2012年に北海道薬科大学コースが新設され、女子生徒の入学者が徐々に増加した。その後、法人全体の改革のスピードが加速し、大学の保健医療学部の実質等に伴い、2016年に本校も北海道科学大学高等学校に校名変更した。その後、医療系進学希望の女子生徒増加、文武両道に対応できる学校体制など、本校の取り組みが徐々に浸透し、系列大学進学を筆頭に、大学進学希望者が多数を占める普通科中心のクラス構成となった。学校全体に占める女子生徒の割合も年々上昇し、40%以上を占めるまでに様変わりした。そのような学校の変化の中で、より魅力的な学校づくりを進め、系列大学進学・高大連携教育に続く魅力づくりのために、英語教育の充実、グローバル体験の機会創出を模索し、管理職を中心に議論を重ねた。時を同じくして、本校卒業生の出資による住協夢プラン奨学生が2016年度から始まり、夢の有言実行の応援とグローバル人材の第一歩としての海外短期留学を二本柱で企画することができ、本校のグローバル教育が2017年度から本格的にスタートした。

*北海道科学大学高等学校

2. ニュージーランド語学研修の内容と成果

2017年度の第1回目の企画にあたり、北海道教育委員会主催の留学説明会や留学ジャーナル等の民間のイベントに複数回参加し、情報収集を行った。また、先進校視察のタイミングを活用し、グローバル教育で実績のある高校からもヒアリングを複数回行った。その結果、研修先は治安が良く、多様な国籍の留学生が集うニュージーランドのオークランドとし、生徒の通常授業への影響や学習面での負担が少ない2月の2週間で実施することとした。初年度については3社に企画のプレゼンテーションを依頼し、安心・安全の担保だけでなく、高校生の留学に関して道内のみならず道外でも実績がある海外留学専門旅行業者のISAの企画を採用することとした。高校側からお願いした主な条件としては①語学研修の充実 ②同世代の高校生・大学生との交流 ③自主性を重んじるプログラムの3点である。この研修を通して「もっと英語を学びたい」「もっと長期間留学したい」など、この留学で完結するのではなく、次の学びに向かう行動や目標につながる取り組みを期待した。

先ほども述べたが今回の奨学金は住協夢プラン奨学金を原資として活用しており、出資者から、生徒の自己負担(パスポート・現地での生活費程度)を極力少なくし、全額奨学金で対応してもらいたいと

いう強い要望があった。どのくらいの生徒がエントリーするか不安であったが、6月の校内説明会には予想を大きく上回る、42名の生徒と40名の保護者計82名の参加があった。結果としてエントリーは4名の募集に対して30名の応募となった。選考内容としてはエントリーシートの記入、個人面接(30分程度)、語学力テストの3項目である。意欲がどの応募者も非常に高く、最終的には語学力テストの結果を重視し、4名(1年生1名・2年生3名)の生徒を選考した。

その後、充実した事前研修(海外での生活について・ホームステイ先での対応について・自主研修について・北海道及び札幌のプレゼンテーションについてなど)を計画的に行い、参加生徒の意識向上や保護者も含めた不安解消に努めた。今年で3回目となったニュージーランドでのプログラム日程は以下の通りである。

表1 ニュージーランド語学研修日程(2019年度版)

1日目	新千歳空港発経由便にて出国
2日目	到着・各ホストファミリー宅へ
3日目	CCEL(語学学校)
4日目~7日目	同上・午後はアクティビティ
8日目	オークランド市内見学
9日目~11日目	生徒主体の自主研修
12日目	現地校訪問(交流・プレゼン)
13日目・14日目	CCEL(語学学校)
15日目	生徒企画の自主研修
16日目	オークランド空港発経由便にて帰国
・引率教員は延べ2名(前半10日間・後半10日間で引継ぎを行う)で現地ISAスタッフとも協力し対応。	
・生徒は1家庭1名でホームステイ先に滞在。	

ホストファミリーとの関係も語学学校での世界各国からのクラスメートとの関係も日を追うごとに良い意味で変化し、濃密なものになっていくことは3年間のどのメンバーでも明らかである。聴くことに慣れるにつれて、徐々に反応速度が増していき、自

分の意見をしっかり持っており、意思表示が明確な海外の仲間と触れ合う中で、表情・身振り手振りなど語学以外の表現方法も豊かになってくる。もっと理解したい、もっと伝えたいという思いと同時に自ら話しかける、会話に加わる、食事に誘うなどの能動的な活動とその成功体験を通して、自信を深めているように感じる。

語学学校での研修もレベル設定を現時点の語学力よりも上にしているため、スタートは圧倒され、現実打ちのめされ、苦しんでいる生徒が多いが、企画業者の説明通り、2・3日後には対応できているのが驚きである。やはり、語学はベースとなる基礎力も大事であるが、「何とかしよう」というメンタル的な要素が非常に大きいと感じた。

初年度の1期生は結果として北海道大学、北海道教育大学、滋賀県立大学に合格。2期生も小樽商科大学、千歳科学技術大学に合格し参加者9名中5名が国公立大学に進学し、大学の学部についても語学がキーワードになっている生徒が多い。また、北海道科学大学薬学部に進学した1期生は日本在住の外国人に対応できる薬剤師を目指し、薬剤師に向けての学びだけでなく、語学力を継続的に鍛えている。もともと語学に興味がある生徒、学力が高い生徒が参加しているという側面は否定できないが、アンケートや彼らの留学後の学びに向かう姿勢をみても、彼らの進路に大きな影響を与え、モチベーションの向上につながったことは明らかである。また、留学の振り返り報告でも「更に長期間の留学に挑戦したい」「海外の学生の学ぶ姿勢に影響を受けた」などの声が上がっており、彼らの次のステージである大学進学後の成長も大いに期待できるものである。2期生、3期生については短期留学に参加したクラスメートや先輩からの口コミで一念発起し、エントリーした生徒も多く、参加者の留学後の変化を感じ取っている生徒も多い。ここ最近の入試募集の場面においても保護者や中学校、塾関係者から「留学」「一歩踏み出す機会の提供」などのキーワードを耳にすることが多くなり、まだまだ始まったばかりであるが、本校に対する可能性と期待を大いに高めている。



図1 1期生のホームステイ先ファミリーとの記念写真



図2 1期生の現地校訪問での記念写真



図3 1期生のCGEL（語学学校）でのグループ写真

3. 更なるグローバル体験の企画

英語圏以外のグローバル体験としてアジアへの留学も検討し、2年前の2018年度から歴史的・文化的な学習機会として台湾探究研修がスタートした。本校生徒にとって日本以外のアジアは発展途上のイメ

ージが強く、現在の台湾のIT産業の隆盛や都市部の勢いは生徒の持つイメージとのギャップが大きく、また、先の戦争の歴史も教科書では学んでいるが遠い過去の出来事になりつつある。このような現状を踏まえ、生徒各自で自主研修コースを考え、事前に調べたことと実際に見たものとの違い、同世代の台湾の学生との交流を通じてグローバルな視点をアジアから考える機会とした。11月の校内説明会に20名の生徒と18名の保護者計38名の参加があった。結果としてエントリーは8名の募集に対して16名の応募となった。選考内容としてエントリーシートの記入、集団面接・討論（4人一组45分程度）の2項目で選考した。事前研修で自主研修の内容を文化・歴史の観点から考え、単なる旅行とは違う内容を研修に組み込むことができた。また、事後研修として研修終了後の振り返りをパワーポイントでまとめ、終業式を活用して全校生徒に向けて全員で研修報告を行うことができた。

昨年度の実績も踏まえ、今年度はさらに発展させ、北海道科学大学の学生の取り組みと連携した台湾研修を企画したが、新型コロナウイルス感染症の影響により2月中旬に中止の決断をした。より意味のある研修を目指し、十分な準備期間を活かして次年度はぜひ大学と協力したグローバル研修を成功させたい。



図4 台湾探究研修での集合写真

また、今年度より更に多くの生徒にグローバル体験のきっかけを与えたいということで2018年度から検討していたカナダ（バンクーバー）異文化研修

を企画した。希望する1・2年生全員の参加が可能であり、10日間のプログラムとしては海外のきっかけ、入門となる比較的チャレンジしやすい研修を多く取り入れ、最終的にはカナダの名門大学であるUBCの学生とのPBLを通してグローバル人材の第一歩を踏み出す内容である。全額自己負担(32万円程度)のため、最少催行人数の6名が集まるかどうか募集を行うまで不安であったが、最終的に13名の申込があった。メンバーとしては英語力に不安な生徒や何かを変えるきっかけにしたいという、興味はあるが自信のない生徒が多く集まった印象であったため、スカイプによる英語レッスンなどの事前学習や保護者も含めた説明会を複数回丁寧に行い対応した。結果としては体調不良者が多少は出たが、小さなチャレンジの積み重ねとそれに伴う成功体験の積み重ねにより、出発前よりも成長を実感できる、参加した生徒にとって大きな自信となる10日間の研修を行うことができた。やはり、高校生にとっての未知の国での家族に頼ることができない、個人としての力が試される体験は成長スピードを加速させることを実感した。

4. 今後に向けての提言とまとめ

ゼロから企画し、実際に実行することの困難は随所にあったが、高校生の無限の可能性、機会やきっかけで大きく成長できることを目の当たりにし、今後もより多くの生徒が参加できるプログラムを充実させていきたい。また、法人のスケールメリットを活かしたグローバル教育を構築し、高校の経験を次のステージでも更に広げていく企画を北海道科学大学の取り組みとも連携しながら模索していきたい。

本校の取り組みはこのグローバル体験に限らず、本校での学びを決断してくれた生徒に支えられ、それを応援する保護者の皆様、卒業生の皆様、本校教職員の協力なしには絶対に成り立たない。本校は今後も生徒に成長する場を与え、応援する学校として、我々教職員自身が新しいことに積極的に挑戦し、学び続けなければならないと考えている。



図5 現地校訪問でのプレゼンテーション(カナダ)



図6 UBCの学生とのPBL(カナダ)

参考文献

- (1) キャロル・S・ドウエック: マインドセット, 2016年1月